



父母状

万治元年（一六五八年）、徳川頼宣が和歌山城のお殿様（藩主）であった時のこと。

熊野の山中に住む青年が、父親を手にかけた罪で捕らえられた。ところがこの青年は、罪を悔いるどころか、「私が他人の親を殺したというのであれば、おとがめも当然でしょうが、私が殺したのは自分の父親です。

父親はなまけ者で、酒癖が悪く、注意をすれば暴れるという毎日。家の者はみな困り果てていました。私は間違っています。」

と、牢役人にくつてかかる始末であった。

罪を悔いていない者を罰していいものかどうか、奉行も困っているという話が頼宣の耳に入った。

頼宣は、

「熊野の山中とはいえ、わが領地である。このような親不孝者がいるということは、孝行の精神を伝えるご政道のあやまりでもあり、それは藩主である私の不徳のいたすところである。」

と言って、たいそう残念がった。

頼宣は、すぐに紀州藩の儒学者である李梅溪を呼び寄せた。

「私は、父である家康公に小さい頃からかわいがられ、また、才能を伸ばしていただいた。このご恩は、片時も忘れたことはない。和歌浦に東照宮を建立したのもその思いからであった。その私には、親を手にかけて平気である者の気持ちかわからない。そなたから、青年に『孝行の道』を説いてやってもらいたい。」

「儒教の教典の中に『孝経』^{こうきやう}というありがたい教えがあります。これを毎日わかりやすい言葉で語って聞かせてやることにしましょう。」

この日から、梅溪は青年の獄舎^{ごくしゃ}に入り、孝行の大切さを熱心に説くことになった。ところが青年は、ありがたい教えをいっこうに理解しようとしなかった。二人の根くらべのような時間が毎日くり返された。

三年の歳月が流れたある日、梅溪は、獄舎の青年の顔がいつになく穏^{おだ}やかなことに気が付いた。めずらしく青年が先に口を開いた。

「先生、昨夜初めて父の夢を見ました。夢の中の父の顔は笑っていました。私がほんとうに幼い頃に見た笑顔だと思います。長い間忘れていた笑顔です。」

と言って、にっこりした青年の両目から涙がこぼれた。

「先生が毎日語ってくださった『孝経』の文句は覚えてしまいました。孝は人の徳の一番根本であること、身体は爪や髪の毛に至るまで父母から授かったものであること等、文句は覚えましたがまったく納得できませんでした。なのに、父の夢を見て、目を覚ましたとたん、いっぺんにわかったのです。心にしみたのです。」

「今まで私の話をわかってしなかったのに、どうしてだろうねえ……。」

「はい、自分でも不思議に思いました。そして考えました。もしかしたら、昨日、先生がご自分のお父様のことをお話しされたことと関係があるのかもしれませんが。きっと、先生は学問のことばかりお話しされることにお疲れになったのでしょう。いつもよりもやさしいお顔で、お父様のことをお話しされました。」

梅溪の父、真栄しんえいは、豊臣秀吉とよとみひでよしによる朝鮮出兵の折、朝鮮から日本に二十三歳の時に連れてこられた身であった。貧しく苦しい生活をしながらも、真栄は学問に励み、多くの人々から尊敬される儒学者になった。そして、真栄五十六歳の時、藩主徳川頼宣から召し出され、侍講じこうになった。それから七年後、梅溪十七歳の時、真栄はこの世を去った。梅溪は、苦境を乗り越え、一心に学問に励み続けた父を心の底から誇りに思っていた。

梅溪が父親との思い出を、ぼつりぼつりと独り言のように語ったのは昨日のことである。青年は続けた。

「先生、孝行がいかに尊いかわかった今は、恐ろしい後悔の気持ちでいっぱいです。どうか、一刻も早く私を罰してください。ただ、親孝行を一度もせずに過ぎてしまつたことを悔やんでも悔やみきれないので。」

「そうではないぞ。今、おまえは孝行の道を悟ることができたのだよ。人の道を歩き始めたのだよ。これこそ親孝行ではないか。」

梅溪の目にも涙があふれていた。



このことがあって、頼宣は梅溪とともに、領民のための教訓づくりを行った。そして、生まれたのが『父母状』である。

父母に孝行に	(意味)
法度 <small>はつと</small> を守り	父母に孝行すること
へりくだりおごらずして	決まりを守ること
面々家職につとめ	ひかえめな態度でえらそうにしないこと
正直を本とすること	家業にしっかり取り組むこと
誰も存じたる事なれども	正直を心がけること
さらに相心得るよう	誰でも知っていることであるが
常々から教え申し聞かせておく	さらに心得て生活するよう
	常より教え聞かせておく

『父母状』は、藩政の規範、教育方針として、学問所などで朗読したり、役人によって村人たちに読み聞かせられたりした。やがて藩内に広められ、寺子屋で手習いのお手本として使われ、明治の半ばまで、およそ二百五十年の間、紀州人の心のよりどころとなったのである。

※注1 不徳のいたすところ・・・自分の品性・人格が十分ではなかったために、よくないことがおこってしまっただという内省の言葉。

※注2 儒学者・・・孔子の教えをもとにする中国から伝わった学問を研究する学者。

※注3 東照宮・・・江戸幕府初代將軍徳川家康を神格化し、東照大権現とうしょうだいごんげんとしてまつる神社。

※注4 獄舎・・・罪人を閉じ込めておく所。

※注5 侍講・・・主君に対して、学問を講義する役職。

(参考文献)

・『南紀徳川史』南紀徳川史刊行会



李真榮・梅溪父子の顕彰碑